

---

# ブイゼルの旅～輝く記憶～

ブイゼル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブイゼルの旅～輝く記憶～

### 【Zコード】

Z99910

### 【作者名】

ブイゼル

### 【あらすじ】

チーム稲妻、ブイゼルの過去による、ギャグで、シリアスで、楽しい物語。

彼はゾロアと出会い、冒険が始まる…。

様々な困難を乗り越え、ジムバッジ制覇を目指す彼の旅。  
彼の7年間による成長を描いた物語が、今、始まる。

## プロローグ

「…ブイゼルー！！」

彼は、仲間をかばい、死んだ。

仲間は悲しんだ。

しかし、その彼 ブイゼルは、仲間をかばって死ねたことを誇りに思ひながら死んだのであった。

もちろん仲間は嘆き悲しんだが、ブイゼルが仲間であつていたことを、誇りに思つてゐる。

幸せ者のブイゼルは、隕石の力を吸収してしまつて、水を従えるといふすごい力を手に入れた。

しかし、それはかえつて彼を苦しめてしまつ。

暴走をすれば、自分の意識をも失い、すべてを破壊する力となつてしまつ。

そんな彼が歩んできた、冒険の数々を、今、じこで…。

## 第一話 かけがえのない出会い

「ふう・・・準備できた」

全ては七年前。

今、旅立とうとしているのは、ブライゼルだ。

「よし、行こう

そつこつてドアを押す。

「行つてきまーす！ー！」

「あ、行つてらっしゃいーーー！」

彼は幼き日元父を「くじて」と呼んでいたので、母が送った。

妹も静かに見送っていた。

「地図地図…」

道端でリュックの中から地図を探すブイゼル。

実は少々心配症で、若干方向音痴なのだ。

彼はデリカシーというものがなく、恋愛に関する関心は0%だ。

しかし、頭は良く、運動神経にも優れています。

「ん？」

草むらががさと動いていた。

「誰かいるのかな…」

そーっと草むらに近づく。

「あーーー！」

そこにいたポケモン　ゾロア。

ぎょっとした顔で、ブイゼルを見つめ、こうこつた。

「な…ななな…なんか用！？」

ブイゼルは、噛みすきだなあと思ひながらも、

「…頼む…」

「あー?」

「僕の…仲間にならぬ!ー?」

「ええーー?」

突然言われたら当然驚く。

「いやだつてなんか不安でさ…」

「つたく…なんで俺が…」

「ゾロア〜ん、お願ひだよおー」

「キモい」

そういうながらも一間置き、

「…いいぜ、突っ込み買ひがありそつだし、いーと思ひ」

「ほんとー?」

それが、彼との出会い。

ブイゼルは、いきなりできた仲間であるゾロアのことが大好きになつた。

「 よろしくゾロアー！」

「 わー…お前のことはなんていえぱい？」

「 …ブイゼルでいいよ」

「 そつが。よろしくブイゼル」

「うん」

二人の冒険は始まった。

「ゾロア、僕ね、すげえ変な力を持つてるの、見てて」

「なんだそりゃ」

ブイゼルはゾロアから離れ、

「よつ……」

指の先で、奇妙な白い球を作り出した。

そしてそれを地面に落とし、水がすごい轟音を立ててはじけた。

「……」

呆然と見ているゾロア。

「これ、水の波導じゃないんだよ……なんでだつて、隕石かなんかにぶつかって……」

「……お前も……そうなのか?」

「なに?まさか……」

「俺は、なんでか知らないけど炎操る力を持つてて……」

「悪タイプが?」

「そう、それがわかんないんだ。見てろ」

ゾロアは、口から何やら白い球を作り出し、地面に落とした。

すると、めらめらと炎が燃えた。

しかしそれは草に点火してしまい、大慌てでブイゼルが消火した。

「危なかつたあ…」

「役に立たねえ力を持つちまつたンだよ俺は」

「いつかは役に立つ日が来るさ」

「そりゃ？」

「さきと来るよその日が…」

ブイゼルは、同じような境遇の仲間に会って、うれしかったが悲しかった。

僕と同じように苦しんでいる…。

そして、ブイゼルは足をまた動かし、先へ行く。

ゾロアとともに。

## 第一話 鋼鉄の島

「最初の町は、海にあるんだって」

「海ー? 僕無理だよーー。」

「え? とね... アイアイ・アイランバード」

「言えてなーけど?」

「あ... アイ...」

「アイアン?」

「アーヴそれ。アイア... ム?」

「なにそれ。アイアンだつて」

「アイアヌアイランバード」

「どんだけ滑舌悪いのー?」

「あはは...」

「アイアンだつてーー。」

「アイア... ふーー。」

「あうそれーーこよーし、行ひうアイヌアイランバードーー。」

「歴史でじぶんをめぐらす——」

アイアンアイランド。

しかし、リリィはもはや町がなく、すべてが鉄となり、そういうことばかりいる。

今や廃墟となってしまった島だが、まだ資源が生きており、発掘されるため、まだ繁栄している。

町ではなく一本の巨大な鉄の船の中にいることあり、ポケモンが住んでいたりもある。

しかし、その船 クインテット・クイーン号は、かつて沈んだ船であった。

ブイゼルたちが町についたころ、もう一つの影が動き出したのであつた。

「HJをわがグループの本拠地にしようじゃないか」

「は…」

「HJの世界的に有名なダイヤモンド・ファクトリーの

「…それは…いい考えですね」

「そしてHJの町を占領し、わがグループのものとしよう」

「…はい」

先ほどからずっと暗い応答をしているのは、一回のHモンガ。

実は、このポケモンがたどりてきた壮絶な過去がブイゼルとかかわるのだ。

「暗いぞエモンガ」

「すいません」

「まあいざれにせよ……ここのは私のものになるのだがな

つぶやき、笑みを見せる謎のポケモン。

エモンガは、従うことしかできないのであつた…。

「船の中に町があるって面白いねーー。」

「面白いな」

「…まあいいや、とにかく買つだけ買つていーいつよ。ジムに挑戦するのほそのあとだ」

「ー|曰じや無理だよ」

「あはは…え? そりなのーー?」

「もう一匹仲間を入れないと」

「ガーン…」

ショックを受けるブレイゼル。

「…何あれーー?」

たまたま見てしまったその先にあつたものとはーー?'

## 第三話 タイヤモンとファクトリーと二つの名の犯罪組織

「…なんだあれ！？」

ブイゼルが見たもの。

それは、大きなポケモン //コウシーの後ろについて回っているエモンガ。

黄色い模様が目立つ。

しかし、どこか悲しげで、明らかに無理矢理したがわさせられるといった感じだ。

「…なんか悲しそうなやつだな」

「無理に後ろにつかされたんですねよ」

「そうかもな」

そして、クインテット・クイーン号の中で買い物。

しかし…。

店がだいたいしまっていた。

「なんで？」

「わかんないけど…これは明らかにセリフのやつのせいじゃ？ほら、

いたじゅ た//コウシー

「 そだね」

そして、歩いてこないと、とけない氷が凍つていていたりもした。

そうこうたどりひが、ゾロアが溶かした。

「 せひ、役に立つ よ

「 知るかよ」

さつきの氷。

実は、前回出てきたダイヤモンドファクトリーがかわっている。

・・・・

実は、工場のような名前なのだが大きな犯罪組織なのだ。

そのため、人を殺したり、町を閉鎖するために動く悪の組織である。

また、泥棒として働き、先ほどのミュウツーにたたかうたりするのだ。

そんな会社がなぜこの世に存在するのか。

その理由は、後々、あのエモンガによつて暴かれることとなる。

だってあのエモンガは、囚われの身であり、ダイヤモンドファクトリーとは何の関わりもないから。

「ブイゼル、そろそろ飯にしようぜ……つづりつか何日ノゴロにてる飯  
だよ、早く見つけようぜ仲間」

「…仕方ないわ、はいりん！」

「どうも」

果たしてブイゼルは、仲間を見つけジムに挑戦できるのか？

## 第四話 仲間探しに立候補したのは……？

「…めんどくさいなああのオヤジは」

エモンガが一人、クインテット・クイーン号をさまよっていた。

ミコウジーと別行動しているらしい。

「…なんか面白いことないかしら」

ちなみにこのエモンガは女の子です。

「…ん？」

たまたま彼女が見かけたのは……。

「仲間を探さないこと、こつまでもジムに行かなーぜ」

「わかつしるよーー今から探さうーー..」

「…どうやつて?..」

「むちむち、呼び込みでーー..」

「…めじか」

「クインクト...テット、クイーン<sup>叩</sup>でーー..」

「言えてねーし...」

そういうわけで、クインテット・クイーン<sup>叩</sup>で呼び込みを開始した  
ブイゼルとゾロア。

「誰かーーー僕らと一緒に冒険しませんかーー..」

「お前あほかーー..」

ゾロアがいい感じで突っ込んでいく。

「なんか横に化け狐いるけど気にしないでください——こ——。」

「お前どう呼び込みしてんだ——。」

「うそなアホコントレーニングに見える僕らですけど、なぜか——」

「ねえ——お前何言つてんの——お前があほだよ——。」

そして振出しに戻る。

そこには通りかかったエモンガ。

「……なんだあらじや。もつとまじめにしなやこよアホコント」

でも、エモンガはその前を横切ることができるなかつた。

びひしても、あの二人が気になつて。

「……あの——。」

近づいて、口を開いたエモンガ。

「……なんでしょつ——？」

「……まあ——。」

「お笑いはそんなものじゃないわ——。」

「……あ……もしかしてあなたは……」

「……ばれちゃったかぁ……」

「//...//コウツーの」

「セウよ、あのHモンガよ」

「なんでこつも//コウツーの後ろに?..」

「世界を支配しようとしているの」

「……まじですか!？」

「私は奴隸のようなもので、人質として//コウツーのもとこころく  
ど……」

「本当はいやでしょ?」

「ええ。私は都会で生まれたの。でも、町がアイツにやられて……」

「……許せないな」

「じゃあ僕らの仲間にならない?」

「なりたいわ」

「//コウツーをも、一緒に退治しよう!..」

「ねえ

「まあやつこいつわがでようじへ……あ、でもまあせぬ!!コウジャーを倒すのが先か」

そこでブライゼルの頭脳が動いた。

「……いやかもしれないナビ、『裏切り作戦』ヒツのまじつけへ

「全っぜん。苦こもならなこわ」

「わかった?あのね、こいつあるの……」

果たして、ブイゼルの考えたアイデア、そしてミュウツーを倒す方法は！？

## 第五話 封印大作ソン

「今から作戦説明するよ」

「お~」

「あのね、僕とゾロアはそれぞれ水と炎を操ることが

「ストップ」

エモンガがストップをかけた。

「あの~・・・実は私も電気操れるんです」

「ええ~!~」

「そんなわけで、作戦に入れてください」

「はいはい」

「で? 続きは?」

「まず僕が水を従えて、水で球体を作り出してミュウツーを窒息させるでしょ? そして固定。そこにエモンガちゃんが電気を従えて感電させるでしょ? んで、ゾロアが変なこと言つてミュウツーを動搖させるじゃん? そのあと、僕がどぎめに冷凍パンチを使って水の球体をこおらせる。そして、この封印用の石に封印して終わり」

「んなもん売つてんのかよ!~!~」

「…売つてゐるよ」

「ていうかなんだ俺のポジション……変なこと言つてなんだ！？」

「お前猫？それとも宇宙人？じゃなかつたらアホ？とかいつの」

「…Aかつこよくねーし…つーかそもそも従える力関係ないし」

「ま、頑張れ」

「お前が決めたんだりつが！…」

「私も異議ありです」

「はいなんでしょ、つ？」

「なんでエモンガちやんなの……けやん要らない…」

「じゃあなんていえばここのや」

「普通にエモンガでいいわ」

「わかつた。じゃあエモンガ、お前はさらに大事な役割があるんだ

…」

いよいよ作戦実行。

「俺たちはなんでアフロ持つてんだ?」

「知らないよ、売つてたからノリで」

「おごおこ

「マジかお前……」

「あ、ほらモンガ行っておいで……。」

「うん

「ミコウツーのもとへ向かっていくモンガ。

「すいませんミコウツー様、ほぐれちゃいました

「別にかまわんが

「いまだ、いけモンガあ……。」

「……あんたなんてサイフティーよ

「あああー?」

「キレたそのとたん!!

「今よブイゼル!! 行って……。」

「うん!! 水よ、僕に力を貸してくださいーーー。」

「間抜けな呪文だ

「そんなこと言わずに」

エモンガはゾロアの方へ。

思いつきり水をミコウツーにかぶせ、手で操り、丸く球体を作り出した。

۱۰۷

—いつけ！エモンガ！！

電気よ…私に力を…！」

エモンガは全員に電気をまとい、一気に放出した

そしてそれによつてHウツーは感電。

二十一

「ケツ、お前なんてあほだ」

ゾロアが毒舌を吐く。

「とどめだ！！冷凍パンチ！！」

ブイゼルの腕には冷気が漂い、そしてそれをそのまま水の球にぶつけた。

そして、球が凍るまで…。

ずっと…。

そして、ヒッペんのヒッペんが凍つた瞬間…。

ゾロアが前に出て、石に封印した。

「よつしゃーー！」

「これで正式な仲間だなーーよろしくなエモンガーー！」

「ええーー！」

「ここの」と笑顔で答えるエモンガ。

これまで支配されてきたので、その苦しみから解放されたのだ。

「ありがと、ブイゼル、ゾロアー！」

彼女は、きっと彼らに出来つて初めて笑顔を見せたかもしれない…。



「ふあ～…じや、行くか」

「食料も調達したし」

そんなわけで、町を出よひとつました。

「…あー…ジム…」

アイアンアーランドのアイアンジム。

しかし、閉まっていた。

「あれ?…ジムに挑戦しに来たの?…今ジムコーダーさんは旅に出てしますけど」

通りすがりのベロリンクガに教えられた。

「…ええ~!~?」

「ほかのジムからめぐつて、それからこの町のへ来るところよ

「あつがといわせこました」

「…なんだよ閉まってるんじゃんか。仕方ないね、次の町…。二  
ドルシティへ行くぞ」

「うん…。」

一行は二ドルシティへ向かった。

## 第六話 大爆発を起し…。

「――ードルシティまで結構距離あんな」

「ええ～！？じゃあしきりとりしようよ」

ブイゼルが提案する。

『ええなんでー…？』

エモンガとゾロアは拒否する。

「やつてよ」

ブイゼルが突然キレた。

意外にも怖いのだ、こいつの怒り顔。

「…分かったよ。しりとりだからりからか。じゃあ行くぜ、リング  
マ」

「マンマー」

「ムウマー」

「ジユプトル」

「ルージュラ」

「ら・・・ラルトス!...」

「スバメ」

「メグロ」

「ゴダック」

「クチート」

「止めようよ!」のシリシリ

「リ...え...? もう終わり?」

「もうやめようよ、グダグダしそぎよ」

「はいはい... チツ、もうちょっととやりたかったのになー」

ブイゼルが口をとがらせ文句を言ひ。

「お前は子供か!!」

ゾロアが突つ込んだその時...。

「...げほつ...!...げほげほつ!...」

突然ブイゼルが咳込んだ。

ゾロアは驚き、Hモンガは後ろに下がった。

「げほ……っ……」

そしてブイゼルの顔は徐々に赤くなつていき、ぶつ倒れた！――

「……ブイゼル！しつかりしる――！」

「……熱じやないわね、いきなり倒れるなんておかしいわ……」

そして、倒れてしまつたブイゼルをせめて日陰に持つていいこうとした。

「……はあっ……はあっ……」

しばらく状態をみていたゾロア。

しかし、ブイゼルの体には異常が……。

「…寝たな」

「え？ でもどうするの？ アイアン・アイランドからだいぶ離れてきたから、もう病院とかないわよ」

「そうだな…どうしようか…」

その瞬間だった。

ブイゼルの体には徐々に光が…。

「…ん？」

ゾロアが振り返る。

エモンガもその方向を見た。

ブイゼルの体は、光っていた。

そして宙に浮き、突然光の玉がブイゼルの周りにできて、そしてブイゼルの周りに巨大な球を作り出す。

苦しむブイゼル。

そして、光の周りにはリングが現れ…。

回転を始め…。

やがてそれは、大暴走へと導く。

リングは超高速で回転する。

「…なんだこれ…！？」

「ブイゼルの体内に有り余つてた力が爆発したのかしら…」

「そんなことより止めたいけどでも俺は所詮炎を従える力だし、水にやあ叶わないんだよな…」

そうしている間に暴走は拡大していく。

やがて森を破壊するほどの大勢力となる。

「やべえぞ…！…早く留めないと…つーかお前電気従えるんだろ？  
やれ！…」

「…分かつたわ」

エモンガは光の玉に向けて電気を従え、球を縮めた。

「おお…」

ゾロアは黙つてその様子を見ていた。

そして光の玉が消え、ブイゼルが落ちた。

「…」りや 重症だな

「私のせいじや ないんだから…」

「まあ そうだけども。」

そして、ブイゼルが田を覚ますのをまた…。

「…あれ?何してたんだっけ…シリと？」

「ちばーよ、お前いきなり倒れたんだよ」

「え?覚えてないけど…」

「お前なあ、看病したのにその言い草ねーだろ」

「え?だつて本当に覚えて?」(殴り)

「いい加減にしろーーー!」

「待つてゾロア、ブイゼル本当に覚えてないわよーーー!」

「は?」

「・・・もういいわよ・・・」

エモンガはあきれた。

ブイゼルは訳が分からなかつた。

ゾロアはまだカチンカチンにキレていたとさ。

ニードルシティまで、あとわずか！！

## 第七話　「ードルシティ到着！－▽ドライトス－！」

「…フオー…」ジジが「ードルシティかあ…」

「なんなんだフオーて」

針葉樹がたくさん並び、その針葉樹の根っこにドアが付いており、そこが家なのだ。

大きなスギの木。

そして、ツリーハウスもたくさん。

「楽しそうな町だな…」

「ジム戦ジム戦！－」

ゾロアが思わず、遊ぼうと走り出すブレイズルを止めた。

「ジム戦忘れんじゃなーい！－！」

「あ。」

「あ。、じゃねーよ！－行くぞジム！－」

「終わったら遊びよ？」

「勝手にしろい！－！」

とこりわけで、ジムへ。

「結構不利でしょ……でも僕には冷凍パンチがあるもんね！！」  
「おお……あのミコウツーをも閉じ込めたスーパーパンチ……」

「リリが一ードルジムか！」

「広いなあ……」

「相手は草タイプでしょ？」

「とにかく中に入るついでに」

中は普通にバトルフィールド。

「す、じいなあ……」

私が「おーい」とここへくる。

少し葉っぱが生えていた。

「ジムリーダーさんいますか？」

「こ、るけど何か？」

出てきたのはフシギバナ。

「ジムリーダーさんですか？」

「そ、うだよ。ジム戦かい？」

「は、い……」

「オーい、返事で。じゃあちよつと待つて、最初の相手呼んでくるから」

「はーい」

しばらくして、大柄なドライテスが入ってきた。

「どうも、一戦田担当のドダイトスです。よろしくお願ひしますか」

その大柄な体でお辞儀された。

「……え、こちからこそ……」

そして、ブイゼルたちは話し合いを始めた。

「どうするよ…誰が先に行くの」

「僕が行く」

ブイゼルが言った。

「え？ああ、でもドダイトスは地面・草だから…確かに氷技はいるね」

「じゃあ行くね！！」

ブイゼルがバトルフィールドに立つ。

「じゃあ一戦田！…ドダイトス対ブイゼルのバトル…開始…先攻はチャレンジャーからです…！」

「アクアジョット…！」

ブイゼルは先制で素早い高いアクアジョットを放ち、ドダイトスに大接近…！

「…おお…速いなあ…」

「確かに素早いブイゼルはドダイツスのあの巨体には有利……でも、相性的には不利よ」

「…あいつなら大丈夫さ…！…いけーブイゼル…！」

ブイゼルは先手を取つてドダイツスに突つ込み、まずは直撃…！

結構ドダイツスにダメージが…。

「…ん？ なあエモンガ、よく考えたらさ、地面つて水に弱いよな？」

「そうね」

「だから、相性的には有利な水タイプの技も、タイプ2の地面タイプで効果抜群じゃなくなってるってことか？」

「そういうことよ… でも、ドダイツスが放つ技は確実に草タイプの技。タイプ2がないブイゼルにとっては結構きついはずよ」

「じゃあこっちも技行きますよ。ハードプラント…！」

「そらみる、強い技で来たじゃねーか…！」

「いや、あたしが言つたんだけどその意見」

ブイゼルは持ち味の素早さで空中へジャンプ…！

ハードプラントを見事にかわした。

「おお……」

「カウンターシールド水鉄砲！－！」

地面に着地するや否や、回転を始めた。

「あまい」と……。」

さうして雨を降らす。

「雨何で降りしちビツさんだ？」

ゾロアが身を乗り出しながら言った。

「たぶん、作戦があるんじゃないのかしら」

「ふうん……あ……分かった……！」

「え？」

「あいつの特性、すいすいだ……」

「……雨が降ると素早わ2倍。」

「見ひ、スピinnの回転が速くなつてゐる……」

ゾロアが気が付く。

ブイゼルの回転のスピードが次第に速くなり、水鉄砲がかなり美しく舞つてゐる。

そして、素早くなるために水鉄砲のスピードも上がり、攻撃力も増加している！！

「スゲーなあいつ、頭いいな」

ゾロアが言った。

「…ソーラービームは出せやしない…幽霊で隠れてやがる」

「なかなかね」

「とじめだ、冷凍パンチ！！」

ブイゼルが技を放った…。

その時…！

「ヤドリギのタネー！！」

ドダイトスがその前にブイゼルに種を植え付けた。

すると、ツルがどんどん伸び、ブイゼルの体の動きを封じてしまつた！！

「…」

「さうきの体勢がうそのようだ…！」  
「さうきの体力を奪っていく…！」

ブイゼルはドライツスに勝てるのか？

そして注目の2戦目は！？

第七話 ニードルシティ到着！！▽SDダイトス！！（後書き）

続きまーす。

## 第八話 やぶつを対ブイゼルー！…そして一戦目！…

「うへ…！」

やどりぎがブイゼルの体力を奪いつ…！

「このままじゃまずい…！」

「一気に展開が変わったわね」

「まずこいつ…！」

「さうね…責めて、ブイゼルが回復技か何かを覚えていれば、体力のマイナスはあんまりないけど…」

「無理だろ…」

「ええ。この勝負、結構不利になってるわ」

「見りやわかるナビー！でも…」

「あれだけ張り切つといて、負けたら悔しいわよ

その時…

「…そうだ…！」

ブイゼルの頭には、この厄介なやどりぎを消す方法を考えた…！

「冷凍パンチ！！」

その場から動かなかった。

でも、自分の腹に冷凍パンチを…！

やどりきは落ちた。

「何やつて…」

「確かに草はブイゼルにとつては不利。でも凍り技なら草にも有効！…だからそれを狙つたのね！…」

「お前やつきからカリスマみたいだぞ」

「気にしないでよーー！」

こうしてブイゼルは自分にもダメージを負つたものの、まっすぐにドライツスへ向かい…。

「冷凍パンチMAX！！」

渾身の一撃。

ドライツスの腹に直撃し、ドライツスは田を回して倒れた。

「勝者、フレンドシティブイゼル！！」

「よつしゃーーー！」

「お前頭良すぎねえか！？？」

「あはは… ありがとう。でも疲れたよ…」

「自分に冷凍パンチするなんてびっくりだ！！」

「次はだれが行くの？」

「…じゃああたしが」

「エモンガ？ じゃあ頑張つてね！？」

「うん…」

飛行タイプは草タイプへの攻撃が効果抜群。

期待大の相手だ！！

一回戦開幕！！

「じゃあこっちはジュカインで行きますね」

גַּתְּבָנָה...

ジユカインが威勢のいい、まるで魚屋のオッチャンみたいな返事をした。

「うめん、田舎出身なんだ彼は」「

「そ、うなんですか！？」

「だから、その竹薮の中育つてきた肉体はきっと手強いよ」

「知つてますよね彼の実力！？」

「知ってるけどあえて言わない」

「じゃあさっそくスタートですーー！エモンガ選手対ジユカイン選手

11

「ようじくなあお嬢ちゃん」

「そつ言ひづ呼ばれ方は慣れてません」

「先攻はせつちからな

エモンガは空へ浮かんだ。

「なるほどな、飛行タイプの攻撃で俺を攻めようつか。ふうん  
…」

「行きますよ、エアスラッシュユー！」

「おつとお…」

「へうへらしながらジュカイン避けたーーー！

「へうへらすんなあつーーーお前あほかああああああああああああーーー！」

「ゾロアーー抑えて抑えて」

じぱりくそんな感じでバトルが続く。

「やめてーーー！」

「IJの省略要らぬーーー！」

「あ、僕突っ込んじゃつたーーー！」

「今から突っ込みの醍醐味教えてやるつか？お前ボケばっかりじゃん

「…なんでも…？？？」

さて、ブイゼルの突込み特訓、そして注目の一戦目…！

次回に続く（殴

「ダメーっ、ダメーっ、なんでーっ…！」

## 第八話 やがて対ブイゼル!!そして一戦目!!（後書き）

とこりわけで結局終わりました。

次回に続きます!!

## 第九話 Hモンガ対ジユカイン！！決着、一回戦！！

「Hアスラッシュュー！」

「ひっくちゃんとらっくちゃん！」

「なめてるにもほどがあるわよ…」

そこまで言いかけて、Hモンガの頭の中にアイデアが…。

(…そつか、素早さに勝つには素早さ、回避率を下げるは有效ね…でも、そんな技ないなあ…でも、逆に私の素早さを上げたら、ジユカインのスピードに追いつける…?)

そこまで来て、Hモンガの考えはまとまった。

「高速移動！…！」

Hモンガは自分のスピードを上げようとしているのだ…！

「こつけーHモンガあ…」

「ファイトーHモンガああああああああ…！」

一匹の歓声も大きくなる。

「負けんなあーつ…！」

(負けないわよ田舎もんなんかに…！)

素早さを上げまくったエモンガは、ジュカインに向かっていき…。

「超光速エアスラッシュ…！」

そしてこの一撃はジュカインに一撃、飛行に弱い草タイプのジュカインは敗れ、エモンガの大勝利…！

「やつたーーー！」

「おめでとーーー！」

「イエーイ」

「…チツ、負けたぜ」

「まあまあ、次は僕の出番だ」

フシギバナが前に出る。

「じゃ、行きますか」

ゾロアも前に出た。

「ねえゾロア、突込み特訓は？」

「後でだ」

「じゃあこれより、チャレンジャーゾロア対ジムリーダーフシギバナによる一対一ラストバトル開始…！」

「统一社」

「先攻はチャレンジヤーからな」

「いいぜ……ね」だまし

ゾロアはいきなりフシギバナの不意を衝こうと接近!!

一  
甘しき  
未

……ああ、分かってる！！

ソーバは技を交わされたものの、まじめに答える

す」いねソロバ 世には少強いね」

三　第三回　一　三　川　二　間　三　強　七　才　九　極

ノゾミテ

たどりつけど

その辺、ジムの外。

「…はい、もちろん。奴は必ずや連行します」

ジムの外に、ユキワリシヒグローンが。

そり、これはチーム稻妻編のあのユキメノコヒグローニャだ。

「…任務遂行よ」

「うむ」

ジムと、外で巻き起こる事件とは  
? ?。

「ゾロア、頑張れーつー！」

ブイゼルの声援が聞こえる。

「負けるわけないじゃんかよーーー！」

「ぶちかませ、炎ーーー！」

「ぬいぬーーー！」

次回に続くーーー！

第九話 ハモンガ対ジュカイン！！決着、一回戦！！（後書き）

空白多いわ！

## 第十話 決着ジムバトル！！

「ゾロア頑張れ！！」

「わかつたから静かにしろ……」

そしてゾロアは…。

「奥義…火炎リボン…！」

「なにそれカツコイー！！」

ゾロアの体から帶のような炎が巻き起しる！

そしてそのままフシギバナへ…。

フシギバナはあっけにとられ、このリボンに巻きつかれてしまった  
！！

「…なんだこれは…！？」

「炎を操る力…それが俺には備わっています。だからそれをフルに生  
かした技を考えたんです！」

「…賢いなあ

そしてリボンでフシギバナを締め付ける。

締め付けられると同時に炎が体力を削る！！

「…私の完敗だな」

フシギバナはこのユニークな技の前に倒れかけた。

でも…。

「…あ」

フシギバナは守るを使って炎の帯をはじいた…！

「なつ…」

「すごい技だけど…体力も消費するみたいだね。ジムリーダーとして負けちゃいられないんだよね」

「…ふん、負けはしませんよ」

そしてゾロアはもう一つの技を考えていた。

「…奥義…フュニッシュクスファイヤー！」

「…かつこ…名前ですけど…」

「カツコ…」

そして炎がゾロアの口から放出された…。

しかしその炎が空中に舞い、勝手に動いた…！

「 . . . ?」

そしてそのまま . . . . . 。

フシギバナへと突っ込み . . 。

煙が上がった。

煙が失せた。

フシギバナは倒れていた。.

「勝者、チャレンジヤーーー！」

「やつたずえ！」

「舌がもつれてる

「アーティスト」

「ビニガ」

「…お疲れ…はい、ジムバッジ！」

「ありがとうございますー！」

ジムバッジをもらそくひどりゲット!!

この勢いでまた進むのか！？

ジムを出た。

その瞬間…三匹が一気に襲われる！？

次話に続く！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9991u/>

---

ブイゼルの旅～輝く記憶～

2011年11月13日07時08分発行